

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 聖法

## ——詩篇第1篇——

1976年5月16日

小池辰雄

詩篇の翻訳の「序言」 二元論的構造 エホバの法 詩篇を新約の光で活かす 突き抜けた世  
界 一極絶対 天的必然法則 使徒的信仰 詩篇第1篇「否定道」 祈り

## 【詩篇1】（私訳）

- 1 さいわいなる哉、この人！ この人は  
悪の徒の謀略に歩まず、  
罪びとの途にも立たず、  
嘲者の座にも坐らず、  
2 反つて、エホバの法にこそ、その歡喜があり、  
聖法をば憶う昼も夜も。  
3 その存在は木にぞ似る、水の流く辺に植えられて、  
その期到らばその実を結び、  
その葉もまた凋落むなき。  
4 然かはあらず、かの悪の徒は。  
むしろ似る、風の吹き去る粉殻に。  
5 されば悪の徒は審判に立ち得ず、  
また罪びとは義人の集いに。  
6 宜べ、エホバは義人の道を知り給う。  
されど、悪の徒の途は亡びる。

## ●詩篇の翻訳の「序言」

私が詩篇に親しみをもったのは、ある病床においてでした。病床において私は詩篇を読  
んで、

「ああ、本当にこれは自分の祈りの本だなあ」

ということとその時に思つて、詩篇が身についたように感じました。それから、塚本先生  
と植木さんが編集しているところの『旧約知識』という——相当、学問的な雑誌ですが——



―それに詩篇の研究をずっと連載したわけです。大体、40篇くらいまでやりました。詩篇の講義は、非常に長い詩篇をぬいては、ほとんどもう既に済んでいる。

詩篇の翻訳の序言を、ちよつとここに書いてありますので、お読みします。

「あるとき私はおのが胸底に呻きあることを知った。まことに私は本来、彼の憐れみなくば立場なき者である。希望が私にあるならば、それはただ彼の十字架と復活のゆえである。

この頃はまだ私は「聖霊」ということをそれほど前面に意識していませんでした。

人に責めらるるも、誤るるも、何かあろう。砕けたる魂は、義が天にかく立ち、栄光が御名に帰せらるることを喜ぶ。彼の口はパンをくらわんために存するにあらず、人に訴えんための言葉にあらず、

「彼」というのは、自分のことを第三人称で言っている。

まず神と語り、神に生きんがためである。本当に生きようとするところには、必ずや負うべき何ものかがあり、戦つべき何事かがある。苦しみと戦いなき生活は偽りである。神との活ける交わりなき人生は空の空である。外に悪の世あり、内に罪の心あり。神を知りたる者にとつては、生きることそれ自身が人に対して、己に対して十字架である。これを負う力は彼にある。

「彼」というのはキリストのこと。

我らの心魂の態度は祈りであらねばならぬ。あるがままの己を彼キリストに投げ出してしまつことである。

祈りの姿勢がこういうことであることを私は既にこの頃書いていたんですね。何年だか忘れましたが。

曠野をその揺籃とした民イスラエルが血と涙の歴史を以て編みし祈りがある。「詩篇」

即ちこれである。近世の暁鐘をつち鳴らした預言者は、これを「小聖書」(eine kleine Bibel)と呼んだ。

ルターのことです。

個人の生涯が祈りであるかぎり、ユダヤに咲きしこの花は我らの胸にも咲きかえらねばならぬ。祈祷書は焼かれ、人おのおのの見えざる自由の文字がこれに代わり、新しき葡萄酒は新しき革袋に盛らるべきである。もとより力に余る難路ではあるが、聖霊の自由の灯火を力に弱き翻訳の足を運ぼうと思つ。その文体も自由でありたい。もつて自由訳と名づける。およそ義のため愛のため苦しみまた忍ぶ見知らぬ旅人を、緑の丘あり憩いの汀ある『詩篇』の国に渡すべき小舟の渡守ともこの翻訳がなり得るならば、舟びとの歌は感謝と讃美の外何ものでもない。」

そういう序言です。実はこの序言を読まれて、三谷隆正先生(1889～1974)から非常に丁寧なお手紙をいただいたことを覚えています。



## ●二元論的構造

第1篇の私の訳を読みます。これは原文の韻律に相当合わせようとして苦心した訳です。

1 さいわいなる哉、この人！ この人は

悪の徒の謀略<sup>はかり</sup>に歩まず、

罪びとの途<sup>みち</sup>にも立たず、

嘲者<sup>あざけり</sup>の座<sup>すわ</sup>にも坐らず、

2 反<sup>かえ</sup>つて、エホバの法<sup>のり</sup>にこそ、その歡喜<sup>よろこび</sup>があり、

聖法<sup>みのり</sup>をば憶<sup>おも</sup>う昼<sup>ひ</sup>も夜<sup>よ</sup>も。

3 その存在<sup>ひと</sup>は木にぞ似る、水の流<sup>ゆ</sup>く辺<sup>べ</sup>に植<sup>う</sup>えられて、

その期<sup>とき</sup>到<sup>いた</sup>らばその実<sup>み</sup>を結び、

その葉<sup>は</sup>もまた凋落<sup>しぼ</sup>むなき。

かかるがゆえそのなすところみな栄えゆく。

4 然<sup>しか</sup>かはあらず、かの悪の徒は。

むしろ似る、風の吹き去<sup>もみがら</sup>る粉<sup>こな</sup>殻<sup>がら</sup>に。

5 されば悪の徒は審判<sup>さばき</sup>に立ち得ず、

また罪びとは義人の集<sup>あ</sup>いに。

6 宜<sup>う</sup>べ、エホバは義人の道を知り給う。

されど、悪の徒の途は亡<sup>な</sup>びる。

これは口語訳ではなくて、文語的な訳であります。この詩篇はいかにもユダヤ人らしい構造をもっている。即ち、人間を義人と悪人あるいは罪びとに分けているわけです。善と悪、光と闇に。それで、

「義<sup>ただ</sup>しい者は救われる。悪しき者、罪びとは滅<sup>た</sup>びる。義<sup>ただ</sup>しき者の道は神さまは知り給うが、されど悪しき者の途は滅<sup>た</sup>びる」

と。まさに二元論的です。

「エホバの法を喜びまた護る者は義人であつて、そうでない者は悪人であり罪びとであつて滅<sup>た</sup>びる」

簡単にいえば、そういう構造になっています。もし、このままだったら、それは先程の詩篇34篇とはちよつと違うことになってしまう。

「18 エホバは心のいたみかなしめる者にちかく在<sup>いま</sup>してたましいの悔<sup>くいくず</sup>顔<sup>ずお</sup>れたるものをすくいたもう。」(詩篇34・18)

「22 エホバはその僕等のたましいを贖<sup>よ</sup>いたもう。エホバに依<sup>より</sup>頼<sup>たの</sup>むものは一人だにつみなわるることなからん。」(詩篇34・22)

18節と22節は34篇の非常に大切なところだ。そういう詩篇とは相容<sup>あ</sup>れないことになる。そして、34篇の方が高次な世界で、1篇なんかは大したことない、ということになってし



もうわけです。

「悪しき者の謀略にあゆまず、はかりごと つみびとの途にみちたたず、嘲るものの座にすわらぬ」

というのですから、

「己を義とし、己を聖とする」

という連中です。まさにこれはパリサイ精神です、ある意味において。それを直ちにパリサイとはいいませんけれども、ややもすると、パリサイ精神が巣をくいそうな言葉です。

「俺たちは信仰がある。俺たちは立派に暮らしているんだ」

なんてなわけだね。大体、パウロがそうだったから。キリストを迫害していたパウロがまさにこつち側の人だった。躓いたり転んだりする奴はやりきらないんです、本来非常に立派なひととは、

「あのひとは立派だな」

なんて言われるひとは。

## ●エホバの法

そうなつてくると、どうも第1篇というのは親しみにくいわけです。確かにそういう面があります。けれども、この第1篇をすくうひとつの鍵がある。「すくう」というのは、もうひとつ高次な世界からみる鍵がある。それは第2節、

2 かかる人はエホバの法をよろこびて日ひるも夜もこれをおもう。

という。ユダヤ人は本当に手放しに律法の民で、モーセの十誡以来、律法の民で、その律法を非常に重んずるし、律法に対する畏敬の念——カントの言葉ではないけれども——畏敬の念がある。しかも親しむという。近親感。畏敬の念と近親感というものを律法に対して、ある意味において持つている。だから、今でもユダヤ人は非常に律法を護る。ユダヤの安息日には、物も煮ないというわけだね、非常にいわゆる律法の民なんです。

私たちはこれを手放しで読むわけにいかない。この「エホバの法」という言葉は、「ベ  
ラツ ヤーヴェー」といいまして、「トーラー」というのは「律法」という字です。「ヤー  
ヴェー」という言葉は「エホバ」という。

私はこの「エホバ」という言い方は、やはり昔から馴れて親しんでいるものだから、ちよつと棄てがたい。「ヤーヴェー」といつても学問的にはいいけれども。しかし、「アドナイ」（わが主）という言葉と、「ヤーヴェー」（在るもの）という言葉を両方合わせて、子音と母音で組み合わせると「エホバ」となつたのだから。即ち「エホバ」というのは

「ヤーヴェー、わが主」

という言葉を、子音と母音をつづめたようなものだ。だから案外、「エホバ」という言い方はおもしろいと思う。「ヤーヴェー」という固有名詞と「わが主」という呼びかけと両方



をひつくるめています。だから、「エホバ」でいいのではないかと、また思い返すくらいなものですよ。

「エホバの法」を彼らは正直かなり手放しで喜んでいるわけだ。また、そいつを一生懸命で畏敬の念をもつて護っている。けれども、「ヤーヴェーの法」というのがいわゆる文字化されたところの「律法」として、「ヤーヴェー」がそっちのけになってしまった。即ち、法そのものに囚われて――「律法の義」とパウロが言っているのはそのことです――「律法」「トラー」に囚われてしまった。まさにパウロはトラーに囚われてしまって、こいつを一生懸命でやって護っていた。それが「律法の義」です。

けれども、パウロはその「律法の義」をすっかり棄ててしまったんだ、キリストにでつくわしてから。

「すべし、すべからず」

をいくらやったってダメなんですよ、わるくはないけれども。私たちも道徳を学んできました。道徳も、それは結構なんです。けれども、それでは生命の世界には入らない。そうかと思うと今度は、道徳までなくなってしまうって、何がなんだかわからないような日本人になってしまったら、これもまた困ったものだ。

その「トラー」「律法」のもうひとつ奥を福音的につかんだのがキリストです。

「トラーを喜ぶ」

といっても、彼らの喜びよりも、キリストが神の律法を喜んだその喜びは、同じ喜びでも内容がちがう。キリストはトラーの奥に、神、父としての神――「神父」ではないですよ、カトリックの神父さんと間違えては困る――父神、父なる神の、「トラー」ではなくて活きた聖なる意志また聖なる御言――神意といったって、聖意といったって、どっちだっていい――神の言、また神の意、それをキリストはじかに聴いているわけです。もちろん、「トラー」はひとつのサンプルではありません。サンプルであつても、それにこだわらない。キリストは、

「律法の一点一画もおろそかにしない」

と、これも成就されるようなことを言われました。ということは、律法をなにも無視しているのではない。律法の外側は問題ではない。内側が問題。律法の根本精神です。

キリストの「山上の大告白」をみれば分かるでしょ。キリストは、

「『殺すなかれ』と律法にあるが、兄弟を憎む者は殺したのである」

と言った。即ち、律法の奥のもうひとつ深い意味でキリストはモーセの十誡以上のものをつかんでいる。それは神の意をつかんでいるからです。キリストは律法をただ外側から満たしたのではない。内側から満たしたから、いわゆる律法は自由に破ってしまった。だから、彼はいよいよユダヤ教の人たちには躓かれたわけです。キリストは

「躓きの石」



と言われる。まず本当の真理はやはり「狭き道」だね、つくづくそう思う。

### ●詩篇を新約の光で活かす

詩篇を新約の光で活かさなくてはいいかん。いわゆる学問的な研究はひとつの手段であるけれども、それで聖書をいわゆる歴史的な角度から読んで、これは読めない。我々がこの旧約聖書を聖書とするゆえんは、キリストがまたパウロたちが旧約を本当に新しくつかみ直しているその角度から読まなかったら、旧約はダメです。だから、

「キリストを受けとるところの小さき者も預言者より大である」

とキリストが言われた。「預言者」も素晴らしい言葉なんだけれども、彼らは本当のその域には、願っていたけれども、達し得なかった。これはキリストが全部満たしてしまったのだから。律法も満たし、預言も満たしてしまった。「旧約聖書」のことを

### 「律法と預言」

といいます。その律法も預言も、キリストはその内容以上の次元においてこれを満たした。そういうことでありまして、「律法を喜ぶ」というその奥には――律法は神の言でありますから、その神の言を喜ぶためには――神を喜ばなければいけません。言を通して神を喜ばなくては。ただ冥想したってダメです。その律法を通して、即ち旧約の言を通して、その奥の神を喜ぶ。

「エホバの神を、法をよろこびて、昼も夜もこれをおもう」

という。「これをおもう」というのは、昼も夜も律法を通して、神の言を通して、神をおもわなければいけません。「聖書研究会」なんて、聖書を研究して、聖書の意味がわかって、それでおしまいなんてものはどうにもならん。「意味ではない」と私は言うんだ。

「わが言は霊なり生命なり」

という。その響きを通して

「直接に神・キリストに直結せよ」

と言うのはそのことです。

だから、今日は「聖法<sup>せいほう</sup>」と書きました。「エホバの法」は即ち神の法、霊法、神法といってもいい。これを喜ぶのは即ち、「霊なる神を喜ぶ」というところにこなかったならば、「律法を喜ぶ」ということが本ものにならない。霊なる神、神法の神を本当に具現したところのキリストこそこの聖法体なんです。聖法の実現体です。聖法を自由自在に体现した者はキリストですから。だから、我々にとっては、

「エホバの法をよろこびて、昼も夜もこれをおもう」

とは、

「キリストをよろこびて、昼も夜もこれをおもう」

ということになる。



「キリストはわが歓喜の喜び。キリストは大歓喜の音信そのもの」  
です。集会に来てですよ、一緒にその世界に入って、一週間を突っ走ってください。

「忙しいから日曜は来れない」

なんてやっているのよりかはるかに君たちのほうが力が出るから。

いっぺん集会を解散しようかな、僕は。もう解散して、本当にその気合で臨む人たちだけでたくさんだから。五、六人でいいよ。だいたい今日は激しいことを言ってすみませんけれども、私の気合を受けとってくださいよ。いわゆる言葉じりではないですから。その大歓喜の音信そのものであるキリストを喜ばざるをえないではないですか。

「私はもう少し考えてから集会に行きます」

なんて、なにをぬかすか。そんなのは迎えてやらないから、捨て身で来ないようなのは。

「聖霊を受けなければ、私は死にたいとおもう」

というくらいな、そういうところには神さまは来るんです。そういう大歓喜のキリスト、福音書に来てください。いつも福音書に立ち帰ってください。福音書を読んで、もう無条件にその前に平伏す。なにしろキリストの言葉とその行為はけたちがいですから。キリストに降参しないことには福音書の世界には入れない。

「分かるの、分からないの」

なんて、そんなことではない。分かりっこないよ、そんなのは。

「何が分かったか」

と逆に言いたいよ、「分かった」なんて言ったら。

### ●突き抜けた世界

そういうことで、キリストは、もう私は本当に時々やりきれんです、キリストが私を占領するから。もう祈るも祈らないもないんだね、そういう世界に入ってしまうから、すぐ即刻。もうたちまち異言が爆発しそうになる。

どうぞ皆さん、この福音書を読んで、キリストがわが喜びとならないうちは、本当に読んでいないことにならない。もう自分なんかすつ飛んでいますから、十字架で。さっきの詩篇34篇のとおりです。こういう句はしっかりつかんでおきなさい。

「<sup>22</sup>エホバはその僕等のたましいを贖いたもう。

キリストを通して贖いたもう。

エホバに依頼よりのたのむものは

全存在を任せる者は、

一人だにひとつみなわるることなし」(詩篇34・22)

「なからん」でなくて、「なし」です。そういうところは、「なからん」なんて読んではダメですよ。「一人だにひとつみなわるることなし」とはつきりしてもらいたい。もうとにかく、「で



あろう」とか「パーセンテージ」の世界ではないですから、福音の世界は。100%の世界です。キリストの十字架で我執、自我がすつ飛ばされないでいい人があるんですか。そういうのを

「善とか悪とか、義とか罪とか」

言っているから、詩篇第1篇はそのまま読んだら躓きになる。そこは新約の世界でその相對界をぶち破らなければいかん。親鸞の、

「善人が救われる。いわんや悪人においてをや」

という、その世界。相對を乗り越えた絶対界にはいらなければ、福音の世界は本ものにならない。對することを絶するんです。人間の善惡、

「あの人はどうだ、この人はああだ。悪いのどうの」

なんて言っているうちはダメだ。平伏してかかれと。自分の善も人の惡も、そんなものは問題ではない。

どうして、魂がもつとはつきりと本当の線の太いところに来ないのだろうね、僕はいやになっってしまうよ正直、

「ただしき者は、ただしからざる者は」

なんてそういうことを言っているうちは。キリストが言っているではないですか。

「太陽の光を、雨を、ただしき者にも、ただしからざる者にも、直き者にも、

直からざる者にも、神さまは同じようにくれている」

「恵みは絶対であるぞ、なぜ受けないか」

と。神さまはを品さだめしていらいっしやらない。むしろダメだと思う人ほど、神さまは深く顧みてくださる。

十字架上の片一方の盜賊がはつきりとそのことを言っているではないですか。片方は傲慢だから、

「あんたが神の子なら、俺たちを救ってくれ」

なんて言っている。もう片一方は、

「私は本当に悪い事をしましたから、十字架にかかるのはもう仕方がない。あ

なたは十字架にかかる人ではなかった。せめても御国にいらっしやる時に覺

えてください」

と。これは碎けの魂。キリストと一緒に真つ先に天国に入ってしまった。人間の相對が何ですか。詩篇の14篇に、

「義人なし、一人だになし」

と書いてある。これはパウロがローマ書3章でちゃんと引用している。

そういう、突き抜けた世界。もう相對的な美醜、善惡、大小とかいう相對的概念を抜けてしまう。もちろん、我々は相對界においては相對概念を用いなければならぬときもあ



りますよ。けれども、それを乗り越えた絶対界を本当にうちにもつていなかったら、福音だとか信仰なんて言ったってダメです。

## ●一極絶対

そういうわけで、詩篇1篇は、1篇を乗り越えなければ本当の1篇の奥が読めないといつてもいいくらいなものです。即ち、第2節を私たちはそれで活かしてしまうわけです。

「エホバの法——即ちキリスト、エホバの法を体現したキリスト——こそが本当に私の歓喜である。そして、このキリストを昼も夜もおもう」

と。「おもう」ばかりではなく、この場合は

「キリストの中に祈りこむ」

ことです。我々が「おもう」というときには——「念ずる」という言葉があるね、「念ずる」というのは「祈る」と同じ意味——キリストを念ずる、祈念するわけです。

地球が回転するから、昼と夜がある。そこで光と闇がある。何もわるくはない、光も闇も。それ自身、善悪の判断の内容ではない。ところが、光というものと闇というものが、神とサタンに通ずるとはどういうことか。何か概念が通じてくる。というのは、サタンというやつは闇を利用する。あるときは、サタンは光も利用するよ、サタンというやつはけしからんから。偽りの光をもっている。サタンの存在は、近代人はこのサタンの実在というものをほとんど知らんですよね。

## 「我は世の光なり」

とキリストは言われた。「我は闇なり」なんて仰るわけではない。しかし、闇はひとつも恐いことはない。闇もちつとも恐いことはないことがミカ書に書いてある。7章8節、

「<sup>わがあだびと</sup>我敵人よ我につきて喜ぶなかれ。我<sup>たお</sup>仆るれば興<sup>お</sup>きあがる。幽暗<sup>くらき</sup>に居ればエホ

バ我の光となりたもう」(ミカ7・8)

暗き中でも神さまが光となりたもう。躓いても転んでも大丈夫だと。躓いて転んでみたら、これはキリストの腕の中だったというわけ。闇だと思ったら、神の光に包まれていたというようなわけ。即ち、絶対の光。光と闇を相対的に考えてやっているうちはダメなんです。神・キリストという光をうちに宿せば、もはや闇は問題でなくなる。闇を光に変えてしまう。そうじゃないですか。灯火<sup>ともび</sup>が暗い所にともれば、明るくなるじゃないですか。即ち、相手を変化させてしまうわけです。

だから、絶対なるものは相対界を絶対界へとすくいあげていくわけだ。そういう絶対なるものがこの相対の我々の中に入ってくださるからありがたいではないですか。

「相対界はどうにもならない」

なんて、超然としているのではないですよ、絶対は。絶対なるものは、私たちの中に、相対界の中にいくらでも入ってくる。だから、それを私は



## 「二極絶対」

と言うわけです。キリストという、神という「絶対」はいわゆる「対極」をもたない。対極をもたないから、どれでもを対極とするわけです。

## ●天的必然法則

それで、詩篇1篇で大事なのは、「エホバの法」という奥に、エホバというものが隠れている。キリストが隠れている。キリストという霊法体、聖法体。これが主体なんです。私たちは客体なんです。なぜ喜ぶことができるかというと、これが私たちの中に浸透してくるから。御言が、御霊が私たちの中にやってくるから、私たちはそれによって本当に喜びが発する。相手が客体ではないですよ。向こう側が主体ですよ。こちらが客体です。サブジェクト（主体、主語）は向こう側、神さまの側にある。キリストの側にある。

そういう人は、

3 かかる人は水流<sup>ながれ</sup>のほとりにうえし樹<sup>き</sup>の期<sup>とき</sup>にいたりて実をむすび、葉もまた凋<sup>しぼ</sup>まざるごとく、その作<sup>な</sup>すところ皆さかえん。

そのとおり。これが全部本当に花が咲き実がみのる。

「実がみのらないようなものは切り棄ててしまふ」

なんてキリストが言っておられる。ヨハネ伝15章。花が咲き実がみのるのは、「流れのほとりにうえし樹」という。水だ、霊水だ。からだの中に、存在の中に御霊という霊的な水が入ってくるから、樹は栄えざるをえない。花が咲き実がみのらざるをえない。もうそれは天的必然法則が働いている。天的必然が。これは簡単にいえば天然だ。天然のなんだ。天的必然がはたらいている。

しかし、花が咲き実がみのつても、一向に花を花ともしない、実を実ともしない人がたくさんいるわけだ。だけれども今度は、その実は落ちて、種は地の中でまた破れて、更に展開していく。人生というのはそんなものですよ。

「二粒の麦、地に落ちて死なずば多くの実をむすばない」

そのようなことです。私たちは、結果は問題にしない。自分が本当の花を咲かせ、本当の実をみのらせるだけのなし。それを人がどうするかしないかは、そんなことは知らん。そういうところに魂を、心をすえてかからないと。キリストみたいな素晴しいかたでも、聖霊がくるまでは、弟子もみんな散ってしまった。

「お前たちは私を棄てて散ってしまふ」  
と、ちゃんと見えているんだ、キリストには。

「だけれども、聖霊がきたら、お前たちは私の言ったりしたりしたことが本当に身に付いてくる。そして、お前たちを人をすなだる人にするぞ」

と。本当に数えるくらいなんだ。パウロなんていうのは、まずキリストに逆らっていた。



ひっくり返されてからやつと目が覚めた。そんなもんですよ。

ですから、伝道なんか失敗で結構だ、私は。ただ受けとらなければ、受けとらない人は自分がダメなだけのはなし。人間というのは自分で自分を審いているだけのはなしです。どうぞ、このキリストを本当に一切として、私みたいな破れ器をとおして伝えられたら、そうしたら、そのキリストを伝える。お釈迦さんも、

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

と言った。イエス・キリストも、

「聞く耳ある者は聞くべし」

なんて言っているんだから。始めから匙投げているね、キリストも。「聞く耳ある者は聞くべし」と、説明しないんだよね。「何とかして分からせよう」なんて思っていない。預言者は、神にとらえられた人はみな孤独です。

「昼も夜もこれをよろこぶ」

と。そして、本当にこの火がつけば今度は、

「どんなことがあっても、本当に私たちは一体です」

と。まあ、友人は――お互いさまみんなこれは欠陥だらけだよ――それを背負って行ったらいいじゃないですか。

「心配いらんよ、私が背負っていくよ」

と。それが本当の友情ではないですか。それを「どうだ、こうだ」なんて、欠点ばかりみてたらどうなるか。本当のエクレシヤというのは、聖霊の愛をもつて貫かれた人たちの群れです。

私は、そういう「うるわしき魂」ではゲーテのお母さんは本当にえらかったと思う。人の欠点はひとつも見ない。

「神さまがいいようにしてください。私は一人ひとりのいいところを見て、交わってききました」

と。ゲーテのお母さんはみんなに本当に親しまれた。そういう人です。

## ●使徒的信仰

今言った3節のような、神の栄光が表れている。

「その為すところ皆栄えん」

というけれども、それが栄えるのではない。その為すところにおいて神の栄光が表れていくということです。いいですか。全部、神さまの側のはなし。神の栄光が表れることを讃美することが本当の讃美。感謝することが本当の感謝です。

5 されば悪の徒は審判に立ち得ず、また罪びとは義人の集いに立てない。

と、ここではそう言っているけれども。



「キリストを受けとらない人、そういう人たちは」

ということだ、要するに。「罪びと」だとか「悪の人」なんて言う必要はない。もう相対的な判断を乗り越えたから、第一篇をユダヤ的なものから、善悪の相対から、もうひとつ善悪の彼岸に突き抜ける。

ニーチェというのは、あの頃のキリスト教はダメだったから、ああいう激しいことを言っただけです。反語的にニーチェの言っていることは真理をもっている。そういう善悪の彼岸に立ちますと。

だけれども今度は「悪の徒」ではなくて、神さまをキリストをそちのけにして、「俺たちは」なんて言っているパリサイがいる。「信仰、信仰」と言っ、信仰を私しているところのパリサイがいる。人を審いている。

「私はプロテスタントだ。私はカトリックだ。どこが間違っている、どうのこうのと、プロテスタントとカトリックがしょっちゅうそんなことをやっているうちはダメだ。プロテスタントでもカトリックでもいいよ、そこに本ものさえ来ていれば。そうすれば、もうそんなことを言わなくなる。」

「ああ、あんたのところにも本ものがある。こっちにも本ものがある」

と。在り方は、人間だから相対的にはいろいろちがう。結構でございます。そんな相対的な在り方をどうのこうの言ったつてしょうがないよ。

無教会が、

「教会は形式的だ」

なんて言っ、

「形式は要らん」

てなわけで「無教会」と言う。これは対立しているうちはダメなんです。教会も無教会も自分を乗り越えなくては。セクトになったらダメです、主義、イズムになったら。イズムを乗り越えろ、「無教会主義」ではありませんと。乗り越えてしまふ。だから、私は

「使徒的信仰」

と言う。けれども、使徒たちだつてもちろん躓きをもっていた。彼らだつて人間だから。だから、「使徒的」と言っ、使徒と同じになれ」なんて言っ、使徒的なあの大事な、

「キリストに直結している」

ことを私は「使徒的」と言う。だから、

「使徒的な信仰、キリスト直結で行け」

と。「直結で行く」

というのは、教会や無教会を無視しているのではない。どれでも結構でございます。ただ「本当に御霊の世界に直結しているか？」

ということだけが問題。相対的な判断をどうのこうのと言っているではありません。



だから、そういうように、神・キリストを拒んでいればもうダメだと。

6 宜<sup>う</sup>べ、エホバは義人の道を知り給う。されど、惡の徒の途は亡びる。

「義人」というのは、

「キリストを喜びとし、キリストをわが救いの一切とする人」

を義人といいます。いわゆる相対的な義人ではない。

「義人なし、一人だになし」

という。けれども、キリストに贖われて聖霊をいただいていれば、義人なんです。同時に罪びとです、死に至るまで。我々は死に至るまで「罪びと」にすぎない。けれども、救われている現実においては「義人」である。この二重構造、矛盾構造になっている。けれども、これが必ず恵みによって勝っていく。そのことはマルチン・ルターもはつきり言っています。

「我々は罪びとで惡の徒であり、かつまた義人である」

と、妙なことが言えるわけです。なまの私は罪びとにすぎない。キリストに贖われている私は義人である。皆さん一人びとりがそうです。

私は、こうやって皆さんが録音してくださっていますけれども、ひとつも齒にものを着せずにものを言っているからね、こういうのをやたらなところで聞かせたら困るよ。また躓きになるから。それで躓くなら躓いてもいいけれどもね。それだけのもつと気合が本当に欲しい。

「小池先生はいつたい何を言おうとしているのか、こんな躓きの言葉を言いながら、

実は本当はどん底から愛しているんだ」

ということを受けとってくれないかぎりダメです。

### ●詩篇第1篇「否定道」

私は前にこの詩篇を書いたときに、「否定道」という題で書いた。中味はなかなか書いてあると今でも思っています。いずれ本（小池辰雄著作集第四巻『詩篇珠玉集』1980年刊）にするときは少し筆を加えて出しますけれども。まあしかし、よくこれだけ書いたね。ちよつと一か所読んでみようかな。

「聖法！ 全宇宙を統<sup>す</sup>べ、全歴史を貫く聖なる意志であり、発しては「光あれ！」の靈言となり、現われてはかの民族をエジプトより率<sup>ひ</sup>き出だす行為となった聖法。この聖法の成るがままに、と念じ、これにその身縛<sup>ばく</sup>せられて動く者は恵福<sup>さいわい</sup>である。彼こそは最も自由なる人である。聖法は光よりも輝かしく、闇よりも隠れたる道である。

おもしろいことを言っているな、やっぱり。

聖法一切か、人智本位か！ 択<sup>と</sup>るべき途<sup>みち</sup>はいずれか一つのみ。人生到るところに岐路がある。しかも人生に岐路は唯だ一つのみ。「惡の徒の謀略<sup>はかり</sup>」を斥<sup>しりぞ</sup>け、「罪びとの途」を拒み、「嘲者<sup>あざけり</sup>の座」を否むは、聖法に生きる者のみの敢<sup>あえ</sup>て為し得る積極的否定である。



まあここらはまだちょっと相対的なところがありますけれども。

義の法則と愛の摂理の綾なす聖法に対して、絶対の信頼をおく天から賜った第二の意志（新しき我）は、この人智中心の社会、虚栄虚偽の巢窟、功利打算の生活、不虔不義の現世において、道はただ否定に在りと断ずる。曾て如何なる真の行為が、この世への「否」を以て始まらなかったか。

その意味においては確かです。

神の意志に捉えられた彼らは、否定道をひき廻された。ノア、アブラハム、モーセ、エリヤ、イザヤ、エレミヤ、パウロ、アタナシウス、アウグスティヌス、フランシス、ダンテ、ザヴィエル、ルター、ウェスレー、わが内村、藤井 等々、その存在は秋の夜に闇を否定する星辰の光！ 真理は否定に在る。

ということは、人間の側を否定してかかるといふことで、善悪の否定という意味ではないです、こここのところで言っているのは。いわゆる善悪の否定から乗り越えたところを言っているところがあるが、それはそれで結構です。

そういう否定の道。自分自身を否定してかからなくてはいいかん。己自身を否定してかからなくては。ところが、キリストを否定してしまった、ペテロは。そのことも後のほうに書いてある。それでどうにもならん、キリストを否定する生まれつきの人間は。

そこでキリストはわが願いを、キリスト自身もわが願いを否定して、父なる神に否定されて、汝の意なる十字架の上に。神御自身にとり、言い難く痛ましかりしこの否定。

十字架によつてのみ、罪の救いが臨んだ。云々」

と書いてある。即ち、キリスト自身が、

「わが意にあらず、汝の意を」

と言って、自分の意を否定してかかって十字架についた。十字架は、そういう意味における人間の側の否定の道ですから。それは神の側の大肯定なんです。

そういう意味においてまさに否定道。善悪の否定ではないですよ。善悪の相対的な否定ではない。もつと究極の意味における人間の側そのものの否定。人間の善悪をひっくりめた人間の側の否定です。人間の側をマイナスとし、神さまをプラスとする。相対的善悪は問題でない。これを否定してかかるわけです。これが否定の道。まさにそのとおり。

そうすると、今度は逆に本当に活かされてくるんです。賜りたるものはすべて良からざるはなしです。それが今度は神のものとして生きてくるわけです。決して、ただ否定して何か空漠となってしまうのではない。それを否定すると、我々が賜っている一切のものは今度は、神のものとしてその人の性質や才能や何でも全部神のものとして使われてくる。パウロがその良き例です。

これが第1篇の、新約の光をもって読んだ、いわゆる「善・悪」、「義人・罪び」とを乗り越えた本当の把握で、イエス・キリストというこの聖法体を――活ける聖法体、活法と言っ



でもいい、活ける法だ——この活ける法を喜ぶ。これは喜ばざるをえないではないですか。御霊がかぎりなくやってくるから、楽しくてしょうがない。力がくるから。創造的な人になるから、キリストと一緒に。何がどうなったって絶対に、

「<sup>せ</sup>為んかた尽くれども絶対<sup>のぞみ</sup>に希望は失わない」

です。

いいですか、みんな、勇ましく行ってくださいよ。だいたい今日は激しいことをたくさん言つて申し訳ありませんでしたが、あなた方に怒っているのでも何でもない。また、ただ怒るために怒っているのではない。

「本当に喜びの世界に、よし、先生、行きましょう！」

ということになってもらいたいから言っているだけのはなし。おわります。

## ●祈り

エリヤ、エリシヤ、諸々の預言者を、あなたはイスラエルの道を、これらの魂を呼び、彼らを引き回し、彼らはみな単独の道を歩かせられましたが、しかし、確かにあなたのこの救いの道は彼らを通して脈々として伝わって参りました。そして、主イエス・キリストさまにおきまして、それが彼らの願い以上な事態にかぎりなく展開せしめられ、満たされ、そして、主さま、あなたが本当に神の靈法体として自らを証し給いました。

私たちにとっては、わが喜びは汝キリストのみ。かくして本当に「昼も夜も汝を喜ぶ」と。あなたの喜びが圧倒し給うがゆえに、あなたの福音が圧倒し給うがゆえに、私たちは本当に言うべき言葉を知りません。ただ御名を讃え奉ります。

この詩篇第1篇をその角度から新しく読み直し、そして、善・悪を超越し、また義・罪を、なお相対的なもの乗り越えて、本当にあなたの絶対の救いの中に入れられたこの現実を何をもって表現せんか。無限無量なるものを本当に感謝いたします。この兄弟姉妹たちと共にこのようにして第1篇を新しきあなたのみ光に貫かれて読ませられたことを感謝いたします。

この集會に本当に捨て身で臨んでこない兄弟たちとは別れます。どうぞ、しかし、彼らが本当に悔改めるならば、いつでも、私は何も言いません、いくらでも喜んで迎えます。問題は、ただ私たちはお互いの話ではありません。この福音に対するところの態度ひとつでもって進んで行きたいと思っております。どうぞ、このようにして、神さま、この兄弟姉妹たちをいよいよあなたのものであるとお捕らえくださらんことを切に願ひ奉ります。

その他いろいろ祈りたきことがございますが、どうぞ、それらの人たちにあなたらしき道をもつて呼んで、またつかんで捕らえてやってくださるように切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名により捧げ奉る。アーメン

